

岡本太郎『日本再発見—芸術風土記—』に関する一考察

—新たな「日本文化」像構築の手段と狙い—

志賀祐紀

はじめに

1958（昭和33）年に新潮社より刊行された岡本太郎の著作『日本再発見—芸術風土記—』⁽¹⁾は、彼自身が様々な地方に赴き、例えば、秋田のなまはげ、島根の出雲大社、そして京都の西陣織や徳島の阿波踊りといった「現在」の地方にある風習や建築物、産業、祭りなど色々な事柄に目を向け、日本文化について持論を展開したものである。タイトルが示すように独自の視点で日本を再発見しようとしたのだ。

それ以前の岡本は、尾形光琳の芸術⁽²⁾や縄文土器⁽³⁾、また中世の庭園⁽⁴⁾などの日本の古美術や遺物に注目した論考を次々と発表し、さらには「伝統」の概念そのものについても論じる⁽⁵⁾など、日本の「過去」に着目して独自の日本文化論を積極的に主張していた。それらをまとめて1956（昭和31）年に光文社より刊行した単行本『日本の伝統』は、当時のベストセラーとなった。その次に、岡本は日本の「過去」から「現在」へと視点を移し、地方に赴き、『日本再発見—芸術風土記—』を著したのである。

『日本の伝統』が大きく注目されたように、『日本再発見—芸術風土記—』も刊行するや否や新聞や雑誌で頻繁に取り上げられ、様々な知識人が評するなど脚光を浴び、存在感を示した。このような岡本の日本文化論について考察することは、その当時にどのように日本文化が語られ、当時の人々がどのような日本文化論に魅力を感じたのか、その一面を探る上で意義があるのではないだろうか。

既に筆者は、日本の「過去」に着目した岡本の日本文化論について検討を行い⁽⁶⁾、次のように指摘した。岡本は日本の古美術や遺物の新たな見方を提示しただけではなく、既存の「日本の伝統」像を否定し、「現在」の人々が主体的に「日本の伝統」を新たに捉え直すべきと主張した。そこでは、尾形光琳の芸術や縄文土器などを例に挙げながら、新たに「日本の伝統」として捉え直すことができるものが日本の「過去」には在ると説き、新たな「日本の伝統」創造の可能性を希望的に示したのである、と。そして、本稿では岡本が「過去」から「現在」に視点を移したことにより、どのように自らの論を発展させ、何を新たに主張したのか注目したい。

こうした岡本の「現在」の地方にある事柄への着目については既に、美術史家の榎木野衣氏と民俗学者の赤坂憲雄氏が言及している。

榎木氏は、「古代から現代に至る『日本の伝統』とは異なる別の系を、いま、ここに存在する日本列島のなかから具体的につかみ出そうとする、仮想の『日本』との闘争の旅なのである」、「太郎の旅は、『縄文土器』に端を発しながら、沖縄や東北を通じて、この日本列島のなかに、『日本の伝統』へと『天下統一』することのできない、種々雑多な系を見出す道程にほかならなかった」と述べている⁽⁷⁾。つまり、岡本が地方で見出そうとしたのは、「日本」という一つの枠には収まらない、または既存の「日本の伝統」像

にはあてはまらない多様な日本文化のあり方、そしてその成立ちであると指摘している。果たしてそうなのであろうか。本稿ではこの点について注意深く検討を行いたい。

そして、赤坂氏は、「一九五〇年代になると、縄文土器の発見を踏み台として、太郎は日本列島をフィールドとした歩行と思索の旅へと向かった。それが日本回帰や国学への志向といったものからは、はるかに遠く、パリ体験を仲立ちとした日本再発見の旅であったことを、幾度でも確認しておかねばならない」⁽⁸⁾とし、戦前に岡本がフランスに滞在していた頃⁽⁹⁾に獲得した知に基づいて日本再発見をしようとしたことを指摘している。そして、「それぞれの土地に埋もれている可能性を掘り起こし、どれほど惨めで未熟であるにせよ、あるがままに凝視し、それを問題として発展させてゆくことだ。(中略) 太郎の日本紀行はそうして、『世界的であると同時にローカルな新しい伝統』の創出のための、試行錯誤の現場と化していったのである」⁽¹⁰⁾と述べ、地方に新たな伝統創造の可能性を見出そうとしたとしている。さらに、次のようにも強調している。「太郎が身をやつした民族学者として凝視していたのは、まさに、この弧状なす列島に繰り広げられてきた『いくつもの日本』であり、そこに流れこみわだかまる『いくつものアジア』であった」⁽¹¹⁾と。赤坂氏もやはり榎木氏と同じく岡本が多様な日本文化のあり方やその成立ちに特に目を向けていたことに言及し、さらに様々なアジアの文化の影響に着目していたとも述べている。

ところで、赤坂氏は「日本回帰や国学への志向といったものからは、はるかに遠く」と述べているが、これは岡本の追悼特集が掲載された『芸術新潮』1996年(平成8)5月号⁽¹²⁾における芸術家荒川修作の次の発言を意識してなされた言及である。

思想家としての岡本太郎の凄いところは、日本の民族性というものを前に出して、新しい国学のようなものを打ち立てようとしたことです。欧米の思想によって“植民地化”されていない知性、植民地化されていない言語を、自分で見つけ出そうとしたのですね。風貌も、なんとなく国学者の風貌ではなかったか。もちろん、国学といっても本居宣長から小林秀雄までの「もののはれ」を知るという世界の、じめじめした共同性じゃなく、その対極に立とうとしたのだと思います。⁽¹³⁾

赤坂氏は、荒川のこの発言に対し真っ向から反対意見を述べている。「太郎はあくまで身をやつした民族学者である。そんな太郎に国学者の風貌を認めるのは、いささか無理があるし、『もののはれ』の対極に向かう『新しい国学』といった物言いには、リアルな裏づけが感じられない」⁽¹⁴⁾と。このように赤坂氏は岡本の「現在」の地方にある事柄へ着目した日本文化論を、国学的あるいは日本回帰を志向したものとして読むことを強く否定している。

岡本が「現在」の地方にある事柄へ着目して論じた日本文化論で特に発言しようとしたのは、榎木氏や赤坂氏が特に注目したように多様な日本文化のあり方、その成立ちの存在なのであろうか。荒川が述べたような「新しい国学のようなもの」、日本回帰的な意図は全く無かったのであろうか。本稿では、『日本再発見—芸術風土記—』を中心に、この点について改めて検討を行う。また、当時、岡本の発言の何が注目され、いかに評価されたのか先行研究ではあまり整理されていないので、これについても言及する。

第一章 岡本太郎の『日本再発見—芸術風土記—』における主張

(一) 『日本の伝統』から『日本再発見—芸術風土記—』における岡本太郎の視点の移行

『日本再発見—芸術風土記—』の「あとがき」で、『日本の伝統』の後に「過去」から「現在」に視点を移した理由について、岡本は次のように説明している。

私は今度は「現在」に体当たりしてみたいと思った。最も散文的であり、非芸術的であるときめら

れ、さげすまれ、ほとんどともに顧みられていない、現代日本のありのままの姿から芸術の問題を掘りおこすこと。われわれの誇りと生甲斐を具体的につぎつけ、この辱めをひっくり返すために。⁽¹⁵⁾ 「最も散文的であり、非芸術的であるときめられ、さげすまれ、ほとんどともに顧みられていない」が「芸術の問題」となりうるものが日本の「現在」にはあり、それを再発見するというのだ。さらに、「過去」から「現在」へと視点を移した理由を詳しく見てみよう。

「はじめに」でも触れたが、『日本の伝統』では日本の「過去」に着目し、既存の「日本の伝統」像、そして既存の「伝統」の概念そのものを岡本は強く否定した⁽¹⁶⁾。その否定すべきという主張は『日本再発見—芸術風土記—』にも引き継がれ、そこでも次のように説いている。

伝統はそれ自体として見れば、なるほどよいものに違いない。だからこそ、伝えられ、保存され、われわれのところまで生きのびて来ているのだから。あらゆる試練と、時間の抵抗をくぐって。かつての卑弱なもの、刹那的、過渡的なもの、非本質的なものはその時代と共に価値を失い、脱落し、消えてなくなってしまったのに、無数の人間の経験によってふるいわけられ、選ばれて残ったものには、強靱な価値がある。⁽¹⁷⁾

「伝統」は本来、「試練」と「抵抗」のある長い歴史をくぐりぬけて、「無数の人間の経験によってふるいわけられ、選ばれて」「現在」に残るもので、それは本質的であるはずであり、「現在」において「強靱な価値」があるはずだという。しかし、当時の日本において「伝統」とされているものはそうではないとして、次のように言及している。

伝統自体も、常に新しく根源に向かって見かえされなければ命を失う。日本文化が今日まで逞しい伝統の肉体をもち得ず、ますます先細って影を弱めて来たのは、伝統主義によって固定化され、現在に生かされなかったからだ。⁽¹⁸⁾

これまで伝統主義によって「伝統」がむやみに重んじられ「固定化」され、日本では時代時代に新しくその価値が見かえられることがなかった。つまり、当時の日本（「現在」）において「伝統」とされているものは「無数の人間の経験によってふるいわけられ、選ばれて残った」ものではないのだという。よって、「逞しい伝統」ではなく、「強靱な価値」も無く、「現在」に生かされていないと言っている。つまり、岡本が主張する本来の「伝統」とは全く異なるものなのだ。また、『日本の伝統』では次のようなことも述べていた。

過去の遺産がけっこうだといっても、それは私がいまそう思い、今日現代的にその価値を認め、それを生かすからにほかならない。⁽¹⁹⁾

本来の「伝統」とは「現在」の人々が主体となって価値を認め、生かすべきものであるのだという。伝統主義のように「伝統」であるから、「過去」のものであるから価値があるのではない。よって、伝統主義によって「日本の伝統」とされているものを「伝統」とする必要はないのである。このように岡本は、既存の「日本の伝統」像と既存の「伝統」の概念を否定し、独自の「伝統」の概念を『日本の伝統』から引き続いて『日本再発見—芸術風土記—』でも主張した。

さらに、岡本は日本文化について、次のように言及している。

奈良時代にドッと大陸文化が入って来た。中国、印度、中近東、更にさかのぼってギリシャに至るまでの、歴史上で最も絢爛たる古代帝国の文化。最高度に洗練された美学。—まだ素朴な、原始段階にあった日本貴族は、このケタ違いに腰をぬかし、無条件に受け入れてしまった。無理もない。が、このときから日本文化の運命が決定された。しかも驚異的な大陸文化自体は、既にデカダンスだった。自分達の基盤から創造するという労をぬきにして、既に爛熟を究めた文化の高さをそのまま受け入

れる。(中略)その安易な便宜主義は、その後、現代に至るまでの日本の上層階級、文化の指導層の伝統的な習慣となり、文化意識となったのだ。皮肉っていえば「お手あげ文化」だ。(中略)

結果、生活を抽象した、ていさいのよい趣味的文化はあたかも日本の伝統の如く、ながく続けられる。⁽²⁰⁾

「日本の上層階級、文化の指導層」、いわば既成勢力が「日本文化」としてきたのは、奈良時代以降より外国の文化を「無条件に受け入れてしまった」文化であり、日本人が創り上げたものでないとし、「お手あげ文化」とまで痛烈に皮肉っている。しかも、そのような文化が「日本の伝統」であるかのように思われているという。

以上のように、岡本は「現在」を誤った「伝統」の概念、「日本の伝統」像、そして「日本文化」像が浸透している時代と位置付けた。そして、『日本再発見—芸術風土記—』の「あとがき」で彼が述べたように「最も散文的であり、非芸術的であるときめられ、さげすまれ、ほとんどまともに顧みられていない」事柄、要するにそれまで「日本の伝統」、「日本文化」とはされてこなかった事柄が「現代日本」、「現在」には存在していることに岡本は着目したのだ。よって、本来の「伝統」や新たな「日本文化」像を再発見しようと「過去」から「現在」へと視点を移行したのである。そして、「現在」の地方にそのような事柄が現存すると睨み、岡本は地方へ出かけたのだ。

(二) 岡本太郎が地方で再発見したもの

岡本は地方で具体的に何を再発見したのだろうか。ここで、『日本再発見—芸術風土記—』の「出雲」の章を見てみよう。「秋田」、「長崎」、「京都」に続いて書かれたこの章では、特に岡本は再発見の興奮を文面に露にしなが、出雲大社の本殿について次のように書いている。

日本の過去の建築物で、これほど私をひきつけたものはなかった。この野蛮な凄み、迫力。一恐らく日本建築美の最高の表現であろう。

ふと、私は積木の美しさを思いだした。この建築は本来釘とかその他の接着剤を一つも使わないで出来上ったもの。素材自体が鞏固に噛みあって、空間に抱きあい、動かし難い力学的な美を現出する。そして久しい歴史の暗やみから、建築の根源的な感動を今こゝに伝えて来ているのだ。

構造体以外に、むだな気どり、てらい、装飾は一つもない。—いや、わずかばかりあるのだが、それはいかにも後世、神社建築らしくとってつけたのが見えすいて、かえて気にならない。(中略)

しかしそういう後世にゆがめられたディテールは、目に入らないくらい、はねとばして、そもそもの構造の逞しさがズンととっている。

うかつだったが、出雲大社がこんなにすばらしいものだとは知らなかったし、実は期待もしていなかった。写真で見た限りでは、この迫力と空間性はまったく想像できなかったのだ。今度、体当たりしてみて、かつてこの土地に、われわれの祖先はこういう美意識に生きていたという凄まじさにうたれた。⁽²¹⁾

岡本は出雲で、「われわれの祖先」、つまり「過去」の日本人が持っていた美意識の凄まじさに打たれたという。そこでは、「後世にゆがめられたディテール」、つまり岡本が否定した「お手あげ文化」的な「日本文化」成立後に本殿に加えられたものであろうものは無視している。それ以前の時代の日本人の美意識によって創り上げられたものを発見したのである。

そして、「京都」の章では古い友禅を手に取り、「濃いイマジネーションに彩られた豪快な豊かさこそ、われわれの血にひびく、むしろ最も日本的な伝統と考えたい」⁽²²⁾ と言い、「岩手」の章では中尊寺金色堂を見て、「遅しく、分厚な凄味が迫って来る」⁽²³⁾ と述べている。

このように岡本は、地方で「過去」の日本人が持っていた美意識を「現在」に見出し、その逞しさ、凄味、迫力、豪快など強靭さを強調した。さらに、そのような美意識で「過去」の日本人が創りあげたものが「現在」に存在していることを示し、それは岡本をはじめとして「現在」の人々が主体となって価値を認めることのできるものとして論じている。つまり、既存の「伝統」の概念では見逃されていたが、岡本が主張する本来の「伝統」が「現在」に存在していることを出雲大社や中尊寺金色堂などを挙げて例証したのである。岡本は「現在」を誤った「日本の伝統」像や「日本文化」像が主流として浸透している時代としていたが、その例証によって「現在」は本来の「伝統」を見出すことのできる時代と岡本は位置づけて肯定したといえよう。

また、地方で再発見した本来の「伝統」について、岡本は次のようなことを述べている。

いわゆる日本美、公認された美術史に出て来るような、権威的な貴族文化、繊細、優雅、軽妙、端麗というような系列から全くはみだした異質のもの、むしろ反対の表情である。⁽²⁴⁾

岡本が地方で再発見した「過去」の日本人が持っていた美意識について、その逞しさ、凄味、迫力、豪快など強靭さを強調していたが、それは当時、「いわゆる日本美、公認された美術史」、つまり当時「主流」とされていた「日本美」の系譜とは反対であるという。また、岡本はその再発見した強靭さのある美意識について「われわれの祖先」、「われわれの血にひびく」と繰り返し、「現在」の日本人と繋がるものであることを強調している。つまり、「現在」の日本にはそれまで考えられてきた「日本美」、広くは「日本文化」とは異なる系譜があることを見出したのである。

このことは既に見たように権木氏も着目しているが、さらに考えてみたい。既存の「日本文化」について「お手上げ文化」などと言い、奈良時代以降から続くとしてその系譜もろともに岡本は痛烈に否定していたが、新たな「日本文化」の系譜を見出したことにより、肯定しうる系譜、つまり「過去」をも岡本は再発見したといえるのではないだろうか。

よって、岡本が地方で再発見したのは、「過去」の日本人が持っていた強靭さのある美意識、本来の「伝統」、そして新たな「日本文化」の系譜である。それにより、本来の「伝統」といえるものが存在するとして日本の「現在」を、「いわゆる日本美、公認された美術史」とは異なる新たな「日本文化」の系譜が存在するとして日本の「過去」を肯定しうるものとして位置付けることを岡本は可能にした。つまり、日本の「現在」と「過去」は肯定しうるものであることも地方で再発見したといえよう。

(三) 「直観」を手段とする「日本文化論」

では、岡本はどのような手段で再発見したのだろうか。例えば、中尊寺金色堂では「中に入ると、ピンと」来たという⁽²⁵⁾。そして、その時に感じたことを次のように述べている。

金色堂。そしてあの鹿の角の破片から、古い時代のウメキのように、私に向かって訴えかけてくるものがある。⁽²⁶⁾

反対に、本来の「伝統」を再発見するのに難儀した「大阪」の章では次のようなことを言っている。

何でもそうなのだが、実際にぶつかってみて、ピンとその場で核心をつかまえない限り、頭だけで組立て、こねくり廻したのではウソだ。しかし今度ばかりは、何もふれて来ない。⁽²⁷⁾

その手段は対象物を直接見て「ピンと」くるかこないか、つまり「直観」である。かなり抽象的だが、なぜ「直観」という手段をとったのであろう。理由があるのではないだろうか。「京都」の章で、茶席に招かれた岡本が次のようなことを述べている。

まったくの素人がお茶について発言しなきゃいけないのだ。なまじその道に苦労した目は、あぶな

い、知らずにゆがんで、平気でにぶってる。素人が素直に直観で見ぬくものが、案外本質であり、尊い。お茶が芸術であるならば、そのような素人を相手としてこそ、新鮮に生かされて行くんであって、もし玄人だけでいゝんなら、こんな会をやる意味もないじゃないか—⁽²⁸⁾

岡本によれば、素人が「直観」で見抜く方が本質であるという。玄人、いわば茶の湯の世界での既成勢力が抱く知識、つまり既成概念など不要だというのである。このことに関連して、『日本の伝統』では次のようなことを述べている。

すべての古典はそれぞれの時代に、あらゆる抵抗にたいして現在を決意し、たくましい生命力を充実させた精神の成果です。過去の権威によりかからず、おのれを卑下せず、はげしく生ききった気配にあふれています。そういうものだけが伝統として、精神的に、肉体的に、われわれ現在を決意したものにびりびりつたわってくるのです。⁽²⁹⁾

本来の「伝統」であるならば、「現在」の人々に「精神的に、肉体的に」伝わってくるもの、つまり「直観」でわかるはずだと岡本は主張している。既成概念など不要だというのだ。よって、誤った「伝統」の概念で「日本の伝統」とされているもの、それについて伝統主義者などの既成勢力が作った既成概念を真つ向から全て否定し、無視したとしても、「直観」という手段を用いれば、新たにそれこそが日本の本来の「伝統」といえるものを定義することが可能になるのである。

それだけではない。「直観」を手段とすれば、国内で初めて訪れる地方で初めて見る対象であっても、「現在」の日本人がそれこそが「伝統」だと「直観」して思うものを、新たな日本の「伝統」として取り入れることが可能になるのだ。例えば、「岩手」の章で、中尊寺金色堂について「こゝの凄みはそれとも違う。異質である。ここにエゾの気配がある」⁽³⁰⁾と岡本は述べているが、その「エゾ」について次のように言っている。

今日の日本の歴史、その伝統の中においても、エゾといえはまるで縁のない人種の如くである。だが、そうじゃないのだ。彼らこそ本来の日本人であり、また人間としての生命を最も純粋に、逞しくうち出しているわれわれの血統正しい祖先なのだ。アカデミックな中央の権力、その官僚性によって、不当に押しつぶされ、過去に埋れてしまった、この日本人の魂。それをえぐり出し、解き放ち、われわれの芸術にとって最も緊急であり、由々しき問題としてぶつけて行く。それは他ならぬ私自身の使命ではないか。⁽³¹⁾

このように岡本は「直観」により、「まるで縁のない人種の如く」思われていたとする「エゾ」をも「本来の日本人」、「われわれの血統正しい祖先なのだ」と言い放ち、彼らが創り上げたものやそこに込められた美意識を日本の本来の「伝統」としたのである。このようにして岡本は地方で見つけた様々な本来の「伝統」を、新たな日本の「伝統」に取り入れ、その結果として新たな「日本文化」像、さらには「日本」像を構築しようとしたのではないだろうか。

ここで、岡本が本来の「伝統」を探しに行った場所がなぜ地方なのかということにも触れておきたい。「秋田」の章において、「秋田ほど東京から遠いところはない」として、次のように述べている。

私はこのような、いわばとり残されたところに、古くから永遠にひきつがれて来た人間の生命の感動が、まだなまのまゝ生き働いているのではないかと思った。⁽³²⁾

そして、「日本文化の風土」の章でも、次のようにも言っている。

だが実は地方にこそ、かえって中央アカデミズムに制約されない、自由な可能性があるのも、最も積極的な課題をぶつけることが出来るはずだ。⁽³³⁾

地方は「中央アカデミズムに制約されない」、つまり既存の「伝統」の概念や「日本文化」像に毒され

ていない土地であると岡本は位置づけ、日本にとって地方は本来の「伝統」を見出せる希望ある土地だとしているのである。しかも、仮にそこにあるものが既存の「日本文化」像と異質であっても、「直観」という手段を用いれば、新たな「日本の伝統」像に取りこむことができる。すると、「中央」に希望がなくとも、日本には希望のある土地（地方）が存在しているので、新たな「日本の伝統」を構築する可能性が日本にはあるということになろう。

（四） 岡本太郎の日本再発見の狙い

岡本の日本再発見の目的は果して多様な日本文化のあり方、その成立ちの存在を示すことなのだろうか。荒川が述べたような「新しい国学のようなもの」、日本回帰的な意図は全く無かったと言い切れるのか。

これまで見て来たように岡本は地方で、「過去」の日本人が持っていた強靱さのある美意識、岡本が主張する本来の「伝統」、そして新たな「日本文化」の系譜を再発見した。また、再発見の手段を「直観」とすることにより、初めて訪れる地方で初めて見る対象でさえも、新たに日本の「伝統」として取り入れることを可能にし、既存の「日本の伝統」像とは異なる多様なものを取り入れた新たな「日本文化」像を構築しようとした。よって、榎木氏や赤坂氏が着目したように、多様な日本文化のあり方、その成立ちの存在は示されている。

しかし、岡本の再発見はそれだけではない。本来の「伝統」といえるものが存在するとして日本の「現在」を、新たな「日本文化」の系譜が存在するとして日本の「過去」を肯定しうるものとして岡本は位置づけた。つまり、日本の「現在」と「過去」は肯定しうるものであることを再発見したのである。これはどう考えたらよいのであろう。肯定しうる日本の「過去」の再発見は、回帰しうる日本の「過去」の発見でもあるといえないだろうか。誤った「伝統」の概念や「日本の伝統」像、そして「日本文化」像が作られたとして日本の「過去」を岡本は繰り返し否定しており、無論そこへの回帰ではない。岡本の主張に沿って考えると、不当に見逃されているが肯定しうる日本の「過去」が存在しているのだと主張することによって、彼が否定した「過去」ではない場に回帰が可能なのではないか。そう考えると、荒川が発言した「新しい国学のようなもの」というのは言葉足らずではあるが、必ずしも全てが間違いではないのではないだろうか。もちろん「国学」ではないだろうが。

要するに、日本の「現在」と「過去」は肯定しうるものであることを再発見したと述べることによって、可能性と希望のある新たな「日本」像を岡本は構築しようとしたのではないか。

そして、この再発見の旅を終えて、岡本は次のように言っている。

だが今度の風土記で私の得たものは、むしろ大きな希望だった。たしかに今までいったような多くの条件で隠されてはいる。しかしその厚い層の下に、私はひそかに期待し、探し求めている民族独自の明朗で逞しい美観、民衆のエネルギーを発見することが出来た。⁽³⁴⁾

岡本は日本に希望を発見したのだ。そして、次のように断言している。

繰り返かえしていう。たとえ現実は何れでも、それをひっくり返して逞しい世界文化の前衛に転換する、創造のポイントは至るところにあるはずだ。⁽³⁵⁾

「世界文化の前衛」にさえ成りうると新たな「日本文化」の可能性を大きく示し、日本の「未来」をも肯定しうるもの、希望あるものとして表したのである。

岡本は1946（昭和21）年に復員した直後から、日本の「過去」や既成勢力を打破すべきと激しく主張し、その過激な言動は多くの人々の注目を集めた⁽³⁶⁾。しかしながら実は、岡本は日本の「過去」に対する強

い否定だけではなく、日本の「過去」, 「現在」, そして「未来」を肯定しうるもの、希望あるものとして構築しようとしていたといえよう。

第二章 岡本太郎の『日本再発見—芸術風土記—』に対する反響

1956（昭和31）年の経済白書に「もはや『戦後』ではない」と記され、同年に発行された『日本の伝統』において岡本自身が「近ごろ世の中が奇妙にチンマリと落ちついてきました」⁽³⁷⁾と述べているように、1950年代中盤以降の日本は戦後の混乱期から脱しつつあった。また、例えば、きだみのるの『日本文化の根底に潜むもの』（講談社、1956年）や加藤周一の『雑種文化』（ミリオン・ブックス、1956年）など、日本文化について言及した本が次々と刊行され話題になり、新しい日本文化論に特に関心が集まっていた。そのような状況において岡本が展開した日本文化論は大きく注目されたのである。

では、岡本の日本文化論の何が人々を惹きつけたのであろうか。まず、『日本の伝統』に対する反響から見てみよう。例えば、『サンデー毎日』には次のような評が見られる。

伝統破壊のカコフォニーを勇ましく吹き鳴らす岡本太郎が、これこそ自分の背負った伝統だと怒鳴っているのが、この本だ。（中略）とにかく亀井勝一郎だの、竹山道雄だのといういま流行の古美術解説者が、マクラを並べてなぎ倒されているのは、まことに見もので、戦後とみに浮わつた古美術流行の波が高まっている世間の眼を、落ちつかせるいい薬になるだろう。⁽³⁸⁾

そして、『東京中日新聞』では次のように評された。

この「日本の伝統」では日本の過去の芸術に関する職業批評家たちの盲目的な伝統崇拝を痛快にやっつけている。⁽³⁹⁾

『日本の伝統』に対する評の多くが、以上のような調子である。「伝統破壊のカコフォニーを勇ましく吹き鳴らす」とあるように、既存の「日本の伝統」像を否定したことが注目されている。さらに、亀井勝一郎や竹山道雄などの「古美術解説者」, 「日本の過去の芸術に関する職業批評家たち」に対する痛烈な批判も評価されている。『日本の伝統』で岡本は、伝統主義者が「伝統」をアカデミックな既成概念無しには理解できないものであるかのように「現在」の人々に思わせ、「直観」で「日本の伝統」を新たに捉え直すことを阻んでいると激しく批判した。また、伝統主義者として名指しで批判した亀井の『大和古寺風物誌』や竹山の『古都遍歴』について「伝統とは関係ない」, 「どんな伝統があらたに生かされてくるのでしょうか」ときこおろし、岡本が主張する本来の「伝統」や新たな「日本の伝統」像を捉え直すには意味が無いものとして激しく論難した⁽⁴⁰⁾。このように既存の「日本の伝統」像への強い否定と伝統主義者への痛烈な批判が特に注目され、支持されたのである。

次に、『日本再発見—芸術風土記—』に対する評を見てみよう。例えば、『週刊読売』には次のような評が掲載された。

これは異色のある本だ。このごろの多くの日本文化論が、抽象的な論議で手さぐりをくりかえしているとき、生活の実体のなかからムズと現物をつかみ出してくる仕事だ。学者的な用心深さにわずらわされず、芸術家の直観で切断してゆくから、ときには傍若無人とみえる発言があるが、それだけに文化創造の熱気が全巻にみなぎっている。生産的な日本文化論というべきだ。⁽⁴¹⁾

また、美術評論家の針生一郎は『日本読書新聞』で次のように評した。

むろん、漫然たる旅行記とちがって、あらかじめネライをつけた問題を現地にぶつけてゆく。（中略）

風景、遺跡、民芸、年中行事、食べ物など、あらゆる書物とのふれあいのなかで、この予見がひっくりかえされ、たしかめられ、ユニークな論断にみちびかれる過程に明快な推理と大胆な直観と、それに体あたりの情熱がひらめいている。(中略) 散文的でグロテスクとみえる地方文化のなかから、日本人の誇りと生き甲斐をひきずりだす岡本太郎の姿は、健康で、民衆への信頼にあふれ、愛国的でさえある。⁽⁴²⁾

『週刊読売』では「異色のある本」、針生の評では「ユニークな論断」などとあるが、他の評のタイトルや見出しを見ても、「アクの強い芸術風土記」⁽⁴³⁾、「芸術家の不敵な目で」⁽⁴⁴⁾、「ユニークな眼」⁽⁴⁵⁾などと頻繁に書かれ、独特な日本文化論であることが注目され、高く評価された。

ところで、岡本が日本再発見の手段とした「直観」については、針生は「大胆な直観」と否定的ではないが、『週刊読売』では「芸術家の直観で切断してゆくから、ときには傍若無人とみえる発言がある」と、やや納得できない部分があったことを言及している。これに関し、社会心理学者の南博が『読売新聞』で次のように書いている。

いったい岡本さんは、みんなから「タローさん」とよばれ、ひょうきんで、しかもズケズケともものいう性格なので、なにか、いつも「思いつき」で発言する人だと思われる。(中略) しかし、まじめなはなし、岡本さんは芸術的な直観だけでものごとを判断する人ではなく、強靱(じん)な論理的思考も、つねにはたらかしている。⁽⁴⁶⁾

南は、「芸術的な直観」だけではなく「強靱な論理的思考も、つねにはたらかしている」と敢えて記して岡本を弁護している。これらの評から当時、岡本は自由奔放に発言する人物とされ、彼の日本文化論の独自性や独創性は高く評価されたが、その論の手段が「直観」であることについては論理性や根拠の不足という視点から不信も抱かれていたといえよう。

その他にも、「直観」の問題とは別の視点で論理性や根拠の不足を指摘する書評がいくつか見られる。例えば、『大分合同新聞』を見てみよう。

現実に体当たりし、その生々しさを「文化層の破廉恥な気分たたきつける」つもりであれば、もっと各地の風俗や民衆の生活感情などについて深く掘り下げ、追求せねばならぬのではなからうか。⁽⁴⁷⁾ また、劇作家の木下順二は岡本に次のような疑問を投げかけた。

実にたくさんの方が問題が投げだされているのだが、それらの多くが問題点の暗示みたいなことに止まっているのは残念である。思いつきというのではない。岡本太郎は未知あるいは既知の土地へ出かける前にまず仮説を組み立て、それへの解答を期待しつつ現場へ踏みこむのであって、だから思いつきではないのだが、その仮説が弱いかまた浅い時は、結果も思いつきのものになる。⁽⁴⁸⁾

このように「直観」への不信のみならず、現地での検証や考察の不足も指摘されている。そして、木下に対し岡本は次のように回答している。

性急な駆けあるきではなく、一つ一つをもっとじっくり展開してほしいという声はほかにもあった。勿論その通りだ。しかしそれは必ずしも僕の役割ではない。

僕は問題提起する。そこには既に結論が含まれている。結論なしでは問題提起にはならないのである。データを集め、その間を刻明に埋め立証して行く作業は、また別途の役割だ。是非、専門家に協力してもらいたい。アヴァンギャルドは徹底的に、ふんだんに、問題提起しつづけなければならないのだ。⁽⁴⁹⁾

岡本は「前衛」として問題提起する役割に徹し、詳細に調査したり検証したりするつもりは無いという。そもそも「前衛」とは何であろう。文字通り、守りの前であり、軍隊でいえば本隊に先駆けて戦いの最前線に出ていく部隊のことである。つまり、岡本は「前衛」として既存の「伝統」像や「日本文化」像を打

破するための戦いの最前線に立ち、さらに様々な新しい日本文化論に関心が集まっていた当時において問題提起し、その論争に先駆けようとしたのではないだろうか。よって、岡本は提起した問題を調査し検証するのは「前衛」の役割ではなく、いわば「後衛」の役割であるとしていたといえよう。

では、岡本はそれらの日本文化論の戦いにおいてどの立ち位置にいたのであろうか。『日本の伝統』では、既存の「日本の伝統」像の強い否定と伝統主義者に対する痛烈な批判が特に評価され、それらとの戦いの最前線、つまり「前衛」の立ち位置にいると見なされていたといえよう。また、彼の主張は多くの人々に支持され、当時の主流であったともいえる。一方、『日本再発見—芸術風土記—』については、独創的な芸術家が唱えた独特な日本文化論として大きく注目された。しかし、あくまで独特とされてしまい、多くの人々が追従する論、当時の主流とはなりえなかったのではないか。さらに言うと、新しい「日本文化」像を捉え直す戦いにおいては「前衛」の立ち位置にいる、その戦いの本隊が進むべき前方にいるとは見なされていなかったといえるかもしれない。

しかし、主流ではないにせよ、独創的とされた岡本の主張が当時の多くの人々に注目され、その独特さが高く評価された事実は見逃せない。それは無視されるもの、真っ向から否定されるものでは決してなく、存在感があった。岡本の主張を主流として受容していくかどうかは別にして、岡本が示した新たな「日本文化」像、「日本」像に当時の多くの人々が惹かれたのである。そう考えると、当時の多くの人々が新たに捉えていこうとする「日本文化」像、「日本」像は必ずしも一つの像だけに集約されていくものではなく、揺らぐ余地があるもの、多様な像が存在するものとして想像されていたのではないだろうか。

その後も岡本の独創的とされた日本文化論は期待されている。1959（昭和34）年に彼が沖縄を旅した時には、出発前から既に現地で見聞きしたことについて執筆依頼がされていたという⁽⁵⁰⁾⁽⁵¹⁾。そして、その旅行記として1961（昭和36）年に刊行した単行本『忘れられた日本 沖縄文化論』はやはり多くの人々が関心を持ち、「毎日出版文化賞」を受賞するなど高く評価された。岡本の地方に着目した日本文化論は主流とはなりえなかったが⁽⁵²⁾、当時の多くの人々の「日本文化」像、「日本」像が揺らぐ中、岡本が示した像の独特さが魅力として注目を集め、皮肉にも岡本の主張の趣旨とは異なる形でそれは求められたのである。

おわりに

岡本は地方で、「過去」の日本人が持っていた強靱さのある美意識、岡本が主張する本来の「伝統」、そして新たな「日本文化」の系譜を再発見した。また、その再発見の手段を「直観」とすることにより、初めて訪れる地方で初めて見る対象でさえも、新たに日本の「伝統」として取り入れることを可能にし、既存の「日本の伝統」像とは異なる多様なものを取り込んだ新たな「日本文化」像を提示した。さらに、本来の「伝統」を見出せるとして日本の「現在」を、新たな「日本文化」の系譜が存在するとして日本の「過去」を、また新たな「日本文化」を創造できるとして日本の「未来」を肯定しうるものとして位置づけたのだ。このように論じることによって、可能性と希望のある新たな「日本文化」像と「日本」像を岡本は構築しようとしたのではないだろうか。

ところが、そのように日本の可能性や希望を主張したにも関わらず、『日本再発見—芸術風土記—』は岡本の主張の趣旨よりもその独特さが注目され、当時の日本文化論の主流とはなりえなかった。しかし、当時の多くの人々の「日本文化」像が揺らぐ中、岡本が示した像の独特さが魅力として注目を集め、岡本の主張の趣旨とは異なる形でそれは求められたのである。

『日本再発見—芸術風土記—』、そして『忘れられた日本（沖縄文化論）』の後、岡本は1964（昭和39）年に『神秘日本』を刊行した。そこでもやはり「現在」の地方にあるものへ目を向けながらも、特に信仰や宗教などより神秘的な事柄に注目しており、岡本は前の二著から自らの日本文化論をさらに観念的に展開させている。「直観」を手段とした日本文化論を岡本はさらに追求し、独自性を深めていく。このことについても今後、検討を行いたい。

註

引用史料の漢字は新字体に直した部分がある。

岡本に関連した記事のスクラップブックである『岡本太郎関連記事』（川崎市岡本太郎美術館所蔵）より引用した史料の記事の掲載年月日、紙名または誌名はそこに記載されているものを原則として採用している。

『岡本太郎関連記事』の冊子名は、便宜上、「岡本太郎関連記事」を省略し、例えば『岡本太郎関連記事 1949 No.1』は『1949 No.1』と記載する。

- (1) 『日本再発見—芸術風土記—』は、「芸術風土記」と題し『芸術新潮』1957年4月号から11月号に岡本太郎が連載した論考をまとめたものである。「秋田」、「長崎」、「京都」、「出雲」、「岩手」、「大阪」、「四国」、「日本文化の風土」の章で構成されている。
- (2) 岡本太郎「光琳論（上）非情美の本質」、『三彩』、1950年3月。「光琳論（中）非情美を支えるもの」、『三彩』、1950年4月。「光琳論（下）芸術に於ける装飾性」、『三彩』、1950年5月、（『1950 No.1』）。
- (3) 岡本太郎「四次元との対話 縄文土器論」、『みづゑ』、1952年2月、（『1952 No.1』）。
- (4) 岡本太郎「連載 日本の伝統 庭園について」、『草月』、1955年3月。『いけばな草月』、1955年6月から1956年2月、（『1955 No.1』）、（『1956 No.1』）。
- (5) 岡本太郎「伝統序説」、『中央公論』、1955年12月、（『1955 No.3』）。
- (6) 拙稿「岡本太郎の「光琳論」—「前衛」の流行と展開—」（『美術史論集』第12号、神戸大学美術史研究会、2012年。）、拙稿「岡本太郎「四次元との対話 縄文土器論」についての一考察」（『米沢史学』第28号、山形県立米沢女子短期大学米沢史学会、2012年。）、拙稿「岡本太郎の「伝統論」に関する一考察」（『お茶の水女子大学人文科学研究』第9巻、お茶の水女子大学、2013年。）、
- (7) 榎木野衣「縄文的なるものと日本的なるもの」、『黒い太陽と赤いカニ』、中央公論社、2003年12月、112～113頁。
- (8) 赤坂憲雄「身をやつした民族学者」、『岡本太郎の見た日本』、岩波書店、2007年6月、98頁。
- (9) 岡本は1930（昭和5）年1月から1940（昭和15）年6月までパリに滞在し、『岡本太郎著作集』掲載の年譜の1939（昭和14）年のところには「パリ大学、民族学科卒業」とある。（安藤孝裕・片岡香編「年譜」、『岡本太郎の絵画』、川崎市岡本太郎美術館、2009年、217～218頁。岡本太郎・平野敏子編「岡本太郎年譜」、『岡本太郎著作集 第九巻』、講談社、1980年、429頁。）、
- (10) 赤坂憲雄「世界とはなにか」、前掲註（8）、339頁。
- (11) 赤坂憲雄「おわりに」、前掲註（8）、360頁。
- (12) 岡本は1996（平成8）年1月7日に84歳で死去した。
- (13) 荒川修作「思想家・太郎かあさん」、『芸術新潮』、新潮社、1996年5月、81頁。
- (14) 赤坂憲雄「身をやつした民族学者」、前掲註（8）、97頁。
- (15) 岡本太郎「あとがき」、『日本再発見—芸術風土記—』、新潮社、1958年9月、283頁。
- (16) 拙稿「岡本太郎の「伝統論」に関する一考察」、前掲註（6）。
- (17) 岡本太郎「日本文化の風土」、前掲註（15）、277頁。
- (18) 同上、279頁。
- (19) 岡本太郎「伝統とは創造である」、『日本の伝統』、光文社、1956年9月、71頁。

- (20) 岡本太郎「日本文化の風土」, 前掲註(15), 280~281頁。
- (21) 岡本太郎「出雲」, 前掲註(15), 139~140頁。
- (22) 岡本太郎「京都」, 前掲註(15), 88頁。
- (23) 岡本太郎「岩手」, 前掲註(15), 176頁。
- (24) 岡本太郎「日本文化の風土」, 前掲註(15), 281頁。
- (25) 岡本太郎「岩手」, 前掲註(15), 175頁。
- (26) 同上, 178頁。
- (27) 岡本太郎「大阪」, 前掲註(15), 223頁。
- (28) 岡本太郎「京都」, 前掲註(15), 109頁。
- (29) 岡本太郎「伝統とは創造である」, 前掲註(19), 73頁。
- (30) 岡本太郎「岩手」, 前掲註(15) 1958年9月, 176頁。
- (31) 同上, 178~179頁。
- (32) 岡本太郎「秋田」, 前掲註(15), 29頁。
- (33) 岡本太郎「日本文化の風土」, 前掲註(15), 275頁。
- (34) 同上, 281頁。
- (35) 同上, 282頁。
- (36) 拙稿「岡本太郎の「前衛」—『岡本太郎関連記事 1949 No.1』から」(『米沢史学』第27号, 山形県立米沢女子短期大学米沢史学会, 2011年)。
- (37) 岡本太郎「はじめに」, 前掲註(19), 49頁。
- (38) 「伝統破壊者の見た伝統 岡本太郎著『日本の伝統』」, 『サンデー毎日』, 1956年9月30日, (『1956 No.2』)。
- (39) 「盲目的崇拜に痛打 岡本太郎著『日本の伝統』」, 『東京中日新聞』, 1956年9月11日, (『1956 No.2』)。
- (40) 岡本太郎「伝統とは創造である」, 前掲註(19), 59~60頁
- (41) 「生産的な文化論」, 『週間読売』, 1958年10月5日, (『1958 No.2』)。
- (42) 針生一郎「精緻な文明批評の眼」, 『日本読書新聞』, 1958年9月22日, (『1958 No.2』)。
- (43) 「古さの生地によさ アクの強い芸術風土記」, 『毎日新聞』, 1958年9月9日, (『1958 No.2』)。
- (44) 「芸術家の不敵な目で」, 『朝日新聞』, 1958年9月13日, (『1958 No.2』)。
- (45) 和歌森太郎「ユニークな眼」, 『図書新聞』, 1958年9月20日, (『1958 No.2』)。
- (46) 南博「民衆芸術への愛情 ユニークな観察と思索」, 『読売新聞』, 1958年9月10日, (『1958 No.2』)。
- (47) 「伝統のあり方を追求」, 『大分合同新聞』, 1958年10月11日, (『1958 No.2』)。
- (48) 木下順二「民衆のエネルギーを探る 問題点の暗示にとどまるのは残念」, 『週刊読書人』, 1958年9月29日, (『1958 No.2』)。
- (49) 岡本太郎「エネルギーの再発見 木下順二氏の『日本再発見』評に答えて」, 『週刊読書人』, 1958年11月3日, (『1958 No.2』)。
- (50) 「今度の来島でとらえた“沖縄”も『日本再発見』の一巻として加えられるもようですすでに中央公論をはじめ各新聞、雑誌から沖縄見聞記執筆が依頼されているという。」(「“沖縄はあこがれの島”岡本画伯二科会沖縄支部の招きで来島」, 『琉球新報』, 1959年11月17日, 『1959 No.2』)。
- (51) 「『中央公論』に一回だけ、沖縄報告を書く約束をしていた。」(岡本敏子「縄文の発見から日本再発見へ」, 『岡本太郎に乾杯』, 新潮社, 2002年4月, 134頁。)
- (52) 美術史研究者の山下裕二は、岡本の日本文化論が日本の主流とはならなかったことについて言及している。「多くの人が、戦後五十年間、岡本太郎的な見方ではなく、亀井勝一郎的な見方で日本の伝統にまぎれ接してきたことは紛れもない事実である。」(山下裕二「「激しい伝統」のアジテーター」, 『岡本太郎宣言』, 平凡社, 2000年1月, 40頁。)

付 記

本稿の作成にあたり、佐々木秀憲学芸員をはじめ川崎市岡本太郎美術館の皆様には多大なるご協力をいただいた。この場をお借りして心より感謝申し上げます。